

都市政策・地域経済ワークショップ I 第 10 回 講義要旨

【テーマ】 小須戸 ART プロジェクトの 10 年—小規模アートプロジェクトの継続と地域の変化—

【講師】 小須戸 ART プロジェクト実行委員会代表 石田高浩先生

【日時】 2023 年 6 月 16 日（金） 18:30-21:20

【場所】 オンライン開催

【講義概要】

小須戸（こすど）は新潟市の南東部に位置し、信濃川舟運の川湊として栄えた在郷町。一方、地域の現状として人口減少・高齢化が進み、商店街の減少や街の空洞化も進んでいる。2009 年に地域まちづくり団体「小須戸町並み景観まちづくり研究会」が水と土の芸術祭 2009 の企画提案プロジェクトに応募したことをきっかけに町屋ギャラリー薩摩屋が開館し、2012 年の水と土の芸術祭開催を機に「小須戸 ART プロジェクト」が立ち上がり 10 年以上継続している。過疎地域の地域課題解決の可能性、パンデミック後のアートと地域づくり、アートのあり方の萌芽などについてご講義をいただきディスカッションを行った。

1. 新潟市と小須戸について

- 新潟市の人口は 80 万人弱、平成 17 年に近隣の市町村と合併し、本州で日本海側最大の都市となった。小須戸は新潟市の中心から 20km 離れ、人口は 2020 年で約 9000 人 面積は 17 km² で古い町屋が残っている。信濃川の川湊として栄え、江戸末期から昭和初期には機織りも盛んで小須戸縞という藍染の生地が地元の名産品だった。ボケの花の栽培も盛んで生産量は全国の 8 割を占める。地元のお祭りに小須戸まつりがあり、燈籠をぶつけ合う勇壮な喧嘩祭りである。小須戸も高齢化が進み、高齢化率 2020 年で 37.3%、商店街も閉店する店が多く、商工会会員数がこの 10 年間で 29%減少。2010 年に 23 軒が全焼する火事があり、町並みが消失しこれをきっかけに空き家を解体する動きが出始めた。
- 2007 年新潟大学が小須戸の町並みを調査し、町並みまちづくりの取組みが始まる。2009 年には石田氏も町並みまちづくりの活動に参加し改めて小須戸の町並みの調査を実施。同年の「水と土の芸術祭」で町屋「薩摩屋」が公開され、2011 年に市の文化政策課が実施した「文化施設の在り方 WS」の経緯もあり、2012 年から「薩摩屋」が定期公開を開始。薩摩屋はウナギの寝床のような部屋の配置で、2 階の座敷が客間、土間が折れ曲がり、小須戸の町屋の特徴を有している。
- 「水と土の芸術祭」は 2009 年から 2018 年まで 3 年に一度、計 4 回開催し 4 回目で終了。新潟の有名な芸術祭に「大地の芸術祭」があり、これと「水と土の芸術祭」は別物。対象エリアも予算も規模が違う。2009 年の「水と土の芸術祭」で市民から「アートがわから

ない」とか「税金の無駄遣い」などという批判があがり、2012年には市民が主体的に芸術祭に参加する企画として「市民プロジェクト」が募集・実施され、2015年、2018年は市民プロジェクトを大きな柱にして開催された。「市民プロジェクト」は高い助成率、助成金額が特徴で、市民がアーティストを招聘したり街歩きなど多彩なプロジェクトが企画・実施された。

2. 小須戸 ART プロジェクトについて

- 2013年から2022年まで10回開催。2012年に薩摩屋で芸術祭の作品展示が行われた。南条嘉毅（よしたか）氏の作品を中心に展示。作品展示に住民も協力。南条さんの作品の特徴は、その場所の土を使って絵を描くというものがあり、作品「信濃川」は信濃川の上流から下流までその土を使って、上流は山、下流はマンションが屏風に描かれている。
- 2012年には秋葉区内の文化施設との連携と今後の薩摩屋の使い方について地域で議論していたが、南条さんの提案により新津美術館と連携し、地域にアーティストを招聘する「AIR（Artist in residence）事業」を企画した。2013年から「薩摩屋 ART プロジェクト」として招聘されたアーティストが薩摩屋に寝泊まりして小須戸に滞在し、地域をリサーチしたり、それをもとに作品を制作する活動を始めた。
- 小須戸ゆかりのアーティストに阿部展也（1913-1971）がいる。小須戸の町屋で幼少期を過ごした世界的なアーティストがいるというのは、地域でAIRを行うにあたって興味深い話。
- プロジェクトでは、ホワイトキューブ（美術館のようなニュートラルでプレーンな空間）で展示する作品ではなく、その場所だから成り立つサイトスペシフィック・アートの作品を制作し、展示する。「薩摩屋 ART プロジェクト 2013」では2名のアーティストが参加。前期は鈴木泰人氏、後期は橋本直明氏が作品を展示した。アーティストによって場所の見せ方や着目する地域資源が異なっていることが興味深い。薩摩屋開館後、周辺にカフェ等が3軒オープンするといううれしいニュースもあった。
- 2014年から「小須戸 ART プロジェクト」と名前を変えて、新たにオープンした店や空き町屋など6会場10作品を展示。前回の反省を生かし宣伝に注力した。市民プロジェクトとして3名のアーティストを招聘。
- 2015年は「水と土の芸術祭」に合わせて開催し、南条氏をはじめこれまでのアーティストと連携した作品を展示。それに合わせて薩摩屋を住民ボランティアでペイントしギャラリーらしく改装した。2016年はアサヒアートフェスティバルに参加しトークイベントを開催。2017年は新津美術館との連携を復活。2018年は3つプロジェクトを開催。1軒の空き家を町屋ラボとして整備し公開。3つのプロジェクトで計10名のアーティストが参加し、来場者1564人、10団体以上の視察を受け入れた。

- 2019年からは実行委員会での主催に移行し町屋ラボを拠点とする。2020年からコロナの期間も、多人数が集まる発表機会を設けずリサーチのみ実施する形としたり、時期をずらして開催したりするなど工夫を凝らして開催し、2022年には10回の開催を記念して過去作品の紹介動画を制作。
- 小須戸ARTプロジェクトの特徴をまとめると
 - ◇ 町屋でのAIRの作品展示
 - ◇ アーティストのワークショップ
 - ◇ トークイベント
 - ◇ 新津美術館との連携
 - ◇ 水と土の芸術祭との連携
 があげられる。

3.小規模アートプロジェクトの継続と地域の変化

- プロジェクトを通して、地域が衰退していく負の循環に対して、小さくてもポジティブな循環を生み出していきたいと考えている。その先に、来訪者の増加や新しいお店の出店、移住者の増加に繋がれば、という期待もある。
- 薩摩屋開館後に地域への新規出店が続いたこと等から、地域の変化に対する仮説として、町屋のような住民にとって当たり前の地域資源に価値を見いだす人の存在が重要であり、地域にかかわる人を増やし、地域の資源を内外に発信するためには、これまで地域とかわりの薄かったアーティストやクリエイターとの連携がひとつの手段になると考えた。
- 10年で地域が変わったかという問いには、下記の変化があったと思う。
 - ◇ 素材の提供者やリサーチ協力者が増えた
 - ◇ 参加アーティストが関わったお店に別のアーティストを紹介し、新たな展示に繋がった
 - ◇ 新商品のパッケージデザイン制作をアーティストに依頼した
 - ◇ 地域を訪れるリピーターが現れた

総論として「小さな出会いと交流の蓄積が、地域を変えるきっかけになっている」と思う。

- そうした小さな変化の積み重ねが、形としては、2017年に新潟市の「移住モデル地区」への指定や、2023年には持込の演劇企画の実現等に繋がった。参加アーティストもその後活躍し、プロジェクトに参加し製作した作品でコンペで入賞したアーティストもいる。
- アートプロジェクトはまちづくりの手段になるのか？ということに関しては
 - ◇ そもそもまちづくりは地域側の課題。アーティストはアーティストとしてやりたいことをやり、プロジェクトに参加しており、まちづくりのために参加しているわけではない。アートは地域や社会の課題に明快な解決策提示するものではなく、気づきや思考の取っ掛かりを生み出すものなので、プロジェクトとしては、多くの人にそれに触れていただくことが重要と考えている。

- ◇ まちづくりにつなげるにはプロジェクトの実施後が本番。アーティストの視点を通して再発見された地域資源をどう生かすのかとか、コミュニティを開き関係性を作り続けていく工夫が大事ではないかと考えている。

【質疑応答】 ➤ : 質問 ● : 回答

- 印象的だったのはプロジェクトを10年続けられたことでまちが変わっていった様子を石田さんの目線で語られていた。地域自体がアーティストがやりたいようにやれる街に変貌していき、アートを受け入れられるまちに変わったと思うが、このような理解でよいか。
- アートを受け入れるかどうかは人による。興味があるまちの人は食いつきが良く、ない人はそれほどでもない。ただまちの人の認知度はあがった。それと総じてアート（も含め地域外から人が来ること）に対するまちの人の警戒感がなくなった。好き嫌いも含め、アートの受け止めはそれぞれでいいかなと思う。
- 5～6年がひとつの転換期だったと思う。そこを乗り越え、コロナにもめげず、強い信念で続けてこられた。アートとまちづくりで、まちづくりのことはよく語られるが、アート側のその後を語られているのは素晴らしいと思う。小須戸のアートはクオリティが高い。広告のセンスも抜群。センスがあってこそ成功かと思うがいかがか。
- 関わったアーティストと交流し仲よくなっていく。アーティストの世界はそこまで広くなくみんなつながっていることもわかってきた。作品の質はアーティストによるが、選考には、私も多少の知識はあるが現代アートの専門家ではないので南条さんにもアドバイザーとして関わってもらっている。プロジェクトに応募・参加するアーティスト側にもいろいろ意図がある。小須戸を実験場と考えている人もいる。作品の評価としては、毎回良いアーティストに来てもらっていると思っている。
- 10年継続出来たのは実行委員会の役割が大きいように思うが、何人くらいのメンバーで、どのような役割分担があったのか。
- メンバーは2018年までは小須戸コミュニティ協議会の薩摩屋企画委員会で10名程度、2019年からは実行委員会で5名。とはいえほぼほぼ私ひとりで、広報、助成金の申請などを行っている。規模が小さいのでそれで動いている。口コミで広めてもらうのは実行委員の力が大きい。
- AIRという仕組みを初めて知った。アーティストの滞在中の生活費などは、誰が負担するものなのか。
- レジデンスの制度によるが、小須戸の場合は宿泊場所は実行委員会が提供し、生活費は支給した制作費の中でアーティストが各自で工面したり、それで不足する場合は自己資金で負担したりする。

- お金(制作費の支援)は人が芸術祭に参加するきっかけ・インセンティブにはなると思うが、因子としてどれくらい強いのか、また、助成金以外の因子で参加モチベーションにつながるものなのか。
- アーティスト側ではないので何とも言えないが、作品を発表して多くの人に見てもらったり、専門誌に掲載されることで作家としての認知度が高まること、今後の創作活動に向けて活動実績を積み上げることに参加するモチベーションを見出しているアーティストもいると思う。それに お金が伴うことに越したことはない。

- 地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティというお話があったが、両方の構成員は一部重複するのではないかと思う。テーマ型コミュニティの発達が地縁型コミュニティに何らかの好影響などはあったのか。
- 私自身は地縁型とテーマ型の両方にかかわっていることになるし、重複している。そういった立場から、テーマ別コミュニティでの知り合いを地縁型コミュニティに紹介することもある。その結果、地縁型コミュニティ自体が大きく変わったかと言われると、まだそこまでではない。

- 今まで地縁型コミュニティで居場所のなかったかもしれない人たち（例えば、マイノリティー…女性、障がい者、LGBTQ）が、参画してアイデンティティーを表現することができた…などの例はあるのか。
- 新しく移住してきた人たちは地域のなかに居場所を見つけにくい、イベントに参加して地域に居場所ができたという事例はある。

- プロジェクトを進める中で、苦勞されている点、課題は何か。それと石田先生はアートの範囲について、どのように捉えられておられるのか。
- 苦勞はやはり資金の問題。助成金だけでは足りないのいろいろな工夫をしてやりくりしている。アートプロジェクトは仕事ではなく、趣味と割り切って持ち出しはやむなしと考えている。アートの範囲は一応作品としての造形物や成果物の範囲をアートと思っているが、プロジェクトとしてとらえた場合はプロセスもアートの一部と考えている。

- 私も地域ブランディングを目的としたイベントをしているが、地域外からの共感を得るためには、地域内部の方々の共感や協働がとても重要と感じている。こちらの小須戸アートプロジェクトの集客のうち小須戸内部のお客様の人数や割合はどれくらいか。10年で割合は変わったか。
- 数字としては持ち合わせていないが、来場者数だけでなく、地域の人との関わり方、関係の深さも重要と思っている。それで地域の方々の意識が変わってもらえるとよいと思う。お客様に常連の人はおられるが、回によって参加される人数は異なる。芸術祭があった年は芸術祭と

して大きく広報をするので域外から多く来られた。芸術祭でない場合は地域の人割合が増える。

- 10年の活動素晴らしいと思う。ドクターコースで米国から日本に来ている。このようなアートプロジェクトは大きな意味があると思う。2018年に、新潟市の観光協会の方に、新潟市の北方文化博物館を案内していただいた。その時、小須戸のことは教えてもらえなかった。観光協会の方はなぜ小須戸の取組みを教えてくれなかったのだろうか。
- 新潟市の観光協会の方が売り込みたいところが芸術祭や小須戸ではなかったということ。市民プロジェクトは80もあるので観光協会の方がどれを推すかは難しいこともある。芸術祭事務局と観光協会との連携体制がどのようなものだったかわからないが、市の観光PRと芸術祭がうまくリンクしていなかったのではないか。

(報告者 上田智之)